

明治期の「女性学」

— 山口小太郎の女性観と用語「女性学」 —

遠藤 織枝

はじめに

1996年7月から、明治時代に言語形成期を経た女性のことばの記録と、その方々のことばに関する意識の調査を行っている。そのお1人、全国婦人団体連合会会長の榎田ふきさんのお話を伺ったとき、明治の少女のことばの本があったと思うから、見つかったら送る、と言ってくださり、2日後に送られてきたのが『乙女会話小學スケッチ全』（瀬川頼太郎編、精華書院、1908、以下、漢字は新字体で記す。書名は『乙女会話』と略記する）であった。

この本の巻末に、高等師範学校教授下田次郎、東京市小川女学校校長松田茂、東京外国語学校教授山口小太郎の3氏の批評が総評として40ページにわたって収められている。この最後の山口小太郎教授が榎田さんの御父君であった。

同書には、明治末期の小学校女生徒の話しことばが生き生きとスケッチされ、明治期の女性のことばを研究している者にとり、たいへん貴重な文献である。加えて巻末の山口教授（以下敬称略）の女性観は極めて合理的、進歩的で、明治期にこのような男性がいたのを知りえて意外な収穫となった。さらに山口は「女性学」の語を5回も使っている。「女性学」の用語は1970年代の造語であると疑ったこともなかったわたしにとって非常な響きであった。

明治40年代に、現代のフェミニズムに通ずる新しい女性観をもっていた男性がいたこと、その男性が「女性学」のことばをすでに90年前に使っていること、の二つの「発見」を以下に紹介しようと思う。

1. 『乙女会話小学スケッチ全』の内容

編者の瀬川が序で「見たこと聴いたことをありのままに書きつけたもの」と述べているとおり、小学校の女子生徒が授業中、休み時間などに話していたこと、教師に話しかけてきたこと、同僚教師が話していたことそのままを、182編のせたものである。

第1編を以下に紹介する（本文縦書き）。

1 「すっつ」と手を挙ぐ。

「1年の児はほんとうにおかしいんですよ。『先生々々』

といって手を挙げるから

『黙ってすっつとかう手をお挙げなさい』

といふと皆が

『すっつ』

と言ひながら手を挙げるんですよ。私おかしくなって教室で独りで笑っててよ」

と受持の先生が腹をかかへながらの談話。

評、子供曰く「何がそんなに笑止しいでせう」（松田）

このように、子供の言動で教師がおもしろいと思ったことを書きとめ、（松田）（無名氏）がコメントをつけて、（コメントのないものもある）紹介されている。

巻末に、このスケッチを読んだ下田、松田、山口が女生徒の現状、女子の教育の観点からそれぞれ批評を記している。小論では山口の批評のみを扱う。

2. 山口小太郎の「所感」概要

山口の批評文「乙女会話所感」（以下「所感」と略記する）の概要は次のとおりである。原文は約6000字である。

女は、古事記の伊邪那美命が「あなにやし」とまず言って伊邪那岐命にと

がめられ、ニイチェも「女は最も危険な玩具」と言い、ショーペンハウエルも「女の天職は人類繁殖の外になし」と言う。仏教も女は罪深しと言うし、儒教の人々は七去三従の説を唱えて女を卑しんだ。古今東西を通して女は男より劣るとの女性観は、20世紀の今日でも真理として信ずる価値あるものか。

これらはみな男の思想であり、男が書いたもので、女を奴隷視した伝説である。その後の哲学者も儒教家もこの伝説がしみこみ、同時に男という立場から女をみたものばかりである。

男には女は十分わかっていないのが事実だ。ニイチェが「女は謎だ」といったのは正しい。女を対象として真面目に系統的に研究したものは少なく、まして女の向上、女の発達を真剣に考えた人は全くない。女がえらくなると男は幅が利かなくなると妄信し、女はなるべく無知無力にしておくのが男の利益と考えたからである。

社会の変化とともに女もソロソロ世の中で働かされるようになった。が、男の仕組みだ世の中だから男と同じようには働けない。そこで女はダメだ何をさせても男に及ばないなどと軽蔑されている。女がそれに抗議もせず忍んでいるのは、抗議の申し立てもできないように男がおさえているからだ。

人類の半数を占める女が、男に劣る厄介物で、働くのは男の役、女はただ玩具か繁殖の道具にすぎぬなどと言っているのは男の損だし、人類発達の障害である。

女にふさわしい仕事—教育、保育、医療、会社の計算記帳など—は男を凌駕するはずである。

女子は淑徳、貞操、優美、柔和、艶麗、慈愛を主眼にせよというのはいわゆる奴隷倫理である。男の玩具としての女には容色の艶麗、柔順貞操が最大の要件だろうが、女が男と同等の働きをすることになったら、容色ばかり気にする必要はないし、男には妾をかこう権利があり、女は貞操を守る義務があるなど勝手なことは言えなくなる。

ドイツの婦人自主独立運動で、大学への女性の進学^{ママ}の権利も獲得、医士、弁護士、新聞記者などに女性が進出しているが、男女同業同権は人類発達の自然の趨勢である。

女子教育の方針が女大学七去三従の伝説にとらわれている間は女子はいつまでも男の係累、厄介物で終わってしまう。

日本の男が「女だから」といって何もさせず、女もひっこんでいるのは20世紀の世界の趨勢に合わないと考える。

こうした古来女性を論じた人々の説をみると、女を正しく理解していない。ニイチェのいう「謎」を解くため、人類半数の女の天職を定めるには、まず多くの女性の誕生から死に至るまでの一代の心理作用をくわしく実験しなければならない。年齢身分境遇の異なる多くの女子の感情、意志などを細大なく記述し、これを材料として科学的研究を尽くせば、男の立場からみた偏見の常習を脱した真個の女性学が確立できるはずである。

ニイチェもショーペンハウエルも、孔子も貝原益軒も女性研究では素人であり門外漢である。ハイネやゲーテは女性学の材料を集めようとすれば多く集められるいい地位にいたが、この2人は女性を愛の権化と目した以外は卓説を述べていない。

女性学というのは詩人文士が建設しうべきものではなく、真面目な教育家、宗教家、女子を使用している官庁企業の管理者たちの集めた材料を帰納して成り立つものとする。

この乙女会話は、小学時代の東京のある部分の少女の天真爛漫のことばをそのまま速記したところに女性学の一材料として大きな価値がある。少女の虚栄、嫉妬、猜忌、譎詐、小心、妄信がみなこの会話中に表れ、「今どきの乙女はこんなにひがみっぽい」と驚くのも、考え直してみると、これは今の乙女に始まったものでなく、昔はもっとひどかったと悟り、みな女大学的旧習の産物と評することができる。

これはわずか百数十篇で、これだけで今の乙女はとか東京の少女はなどと一概に言えない。今後より広くこの種の材料を集め、他の教育宗教関係者や鉄道郵便各種商店管理者たちがこの例にならって女子の各方面の言行を実写したなら、たんに女子教育の進歩改良を促す資料となるだけでなく、ひいてはわたしのいう女性学を建設することもできるであろう。（下線 遠藤）

3. 山口の女性学と現代の女性学

山口のいう「女性学」は「年齢身分境遇の異なりたる多くの女子の感情意志等を細大なく記述し」「男の立場から観たる僻論の常習を脱し」（「乙女会話」総評P38）で確立しうるものであった。

現在の「女性学」について『新教育学大事典第四巻』（第一法規出版株式会社1990）は以下のように記述する。

女性の視点から女性をめぐる諸問題を学際的に研究し、既成の学問研究のなかに潜在する男性中心的な見方を指摘し、女性の視点にたった認識枠組みへの転換を図るための研究、教育、運動で（中略）、日本に「女性学」という訳で“women's studies”が初めて紹介されたのは1974年である。

同じことばであるが、目ざすものは同じではない。山口の女性学は男が女をよく知るために究めるものであり、現代のは女性が「女性解放をめざして」（同上事典）究めるものである。

しかしながら、山口の「所感」のように男が働き女は子を産むとの役割分業を否定し、男女同権は世界の趨勢といい、科学的客観的研究により「男の立場からみた偏見の常習を脱した真の女性学が確立できる」との主張は、現在の女性学の目ざすところとも重なり合っている。そのような意味での「女性学」の語が今から90年前にすでに使われていたのである。

4. 明治期女子教育の概観

山口の女性観と「女性学」の語は、いったいどのような時代背景、環境、影響のもとに生み出されたのか。「女性学」はすでにだれかによって造られていたものを山口が使ったのか。それとも山口の造語であったのか。明治期の女子教育の流れを概観しながら以下に模索を試みる。

まず、宮原（1963）、桜井（1942）、伊ヶ崎・松島（1990）をもとに明治期の女子教育を概観する。

明治初期の日本の教育は開明的でかなり進歩的な動きをみせ、中学校も男

女共学が許されていた。政府の女子教育振興の施策に応じるように、キリスト教宣教師たちが、フェリス・共立・青山・立教・同志社など次々に女学校を創設した。

1879年（明12）教育令の公布とともに「学制」は廃止され、翌年の改正教育令では女子には裁縫を課すとされ、男女別学へ軌道修正されていった。

1872年（明5）開校された東京女学校では法制・経済・西洋史・幾何などが教えられていた。1877年（明10）同校は廃校され、1882年（明15）東京女子師範附属高等女学校として復活するが、ここでは東京女学校で教えられていた上記の科目は姿を消し、修身・家政・育児・裁縫・礼節の教科が登場している。

これらは文部省の「優良なる婦女を養成する」方向の具体化で、以後良妻賢母主義への傾斜が強まっていく。

さらに1894、95年（明27、28）の日清戦争を機に国家は軍備拡充の道を邁進、そのためにも教育の振興に力を注ぐようになった。

その要請を受けて三輪田真佐子は「女子は仮りに専門の事をなさんとするも、人の妻たり母たり以て家政を主ることは如何なる女子も免るべからざるを以て、女徳女智一切の能力を稍々等しく養ふべきなり、未来の海国児軍国童の母たるに適する思想を女子に与へざるべからず」（『女子教育論纂』吉本竹次郎編、普及舎、1897）と、従来の良妻賢母に加えて軍国主義国家にふさわしい母を養成することを主張する。

福沢諭吉は『女大学評論附女大学』（時事新報社1899）で、男女同権を主張し「女子少しく成長すれば、男子と等しく体育を専一とし、怪我せぬ限りは荒き事も許して遊戯せしむべし」と、体育面で従来の淑女の教育は否定するが「尚成長すれば、文字を教へ、針持つ術も習はし、台所の世話万端は因より女子の知るべきことなれば、假令下男下女多く召し候ふ身分にても、飯の焚きやうは勿論、料理献立鹽噌の始末に至るまでも事細かに心得置くべし」と、男女同権を説きながらも、結局は主婦として家事をこなすのを女子の任務とした。

1902年（明35）当時の文相菊池大麓は、高等女学校長会議で、「我邦に於

ては女子の職といふものは独立して事を執るのではない、結婚して良妻賢母となると云ふことが将来大多数の仕事であるから女子教育と云ふものは、此の任に適せしむると云ふことを以て目的とせねばならぬのである。即ち専門の学問と云ふものは女子の独立の助けと云ふことになるけれども、これを公に設ける必要はないと思ふのである」と述べ、また大日本婦人教育会では「世間に一時男女同権と云ふ言が甚流行しましたが、私は斯言を忌はしい語であると考えて居ります。併しながら男女同等と云ふ言は実に至当なもので男子であるが故に尊く、女子であるから卑しいと云ふ事はない筈で御座います」と、男女同権を否定し、同等を肯定している。

女子の家事实務能力を養成することを目的とする女学校として、下田歌子が実践女学校と女子工芸学校を開校（1899）、三輪田真佐子の三輪田女学校（1902）、棚橋絢子の東京女学校、山脇房子の実修女学校、嘉悦孝子の女子商業学校（いずれも1903）などがあいついで創立された。

専門教育を旨とするものとして、1900年（明33）津田梅子が女子英学塾を、吉岡弥生が東京女医学校を、成瀬仁蔵らが日本女子大学校をそれぞれ設立した。1901年（明34）には横井玉子らが女子美術学校を開校した。

成瀬の日本女子大学校は、女子を①人として②婦人として③国民として、教育すべきで「女子の主たる天職は良妻賢母にありとするも一生に於いては妻母たる境遇のみに止まらず、個人として働き、国民として行ふべき境遇がある」といいながらも「女子の天職を尽くすに足るの資格を養はしむべし。賢母良妻たるに必要な資格は、道徳、知識、芸能及び体格である。女子の最も重要な天職は母として子女を教育することであり」と、結局良妻賢母教育が最も重要と説くのである。

「国民たる義務を完うするの資格を養ふべし。国家教育を施し、教育は必ず日本のためであらねばならぬ。女子にも一身を扶持するの技倆を必要とする」と女性の自活能力も説くが、それは国家のためであり、女性自身のためではない。平塚らいてうは「第1に婦人を人として、第2に女としてですか、第3に国民として教育すること、の3つがあがってましてね、非常に感心して入る決心をしたんです」ところが実際にやっていたのは「女として国民とし

ての教育で、人としての教育はできていないような気がするんです」「なんか女を国家のために利用するっていうふうなにおいがして不満だったんです」と語っている。^(註1)

1904年(明37)東京女子師範学校教授下田次郎は『女子教育』を刊行した。(金港堂)

下田は1899年(明32)から1902年(明35)にかけてドイツ、英国、米国に留学し西欧の女子教育史、女子教育事情を調査研究し、その成果を上記著書にまとめた。

まず第一編で女子の身体、第二編で女子の心理を説くが、このような女性の身体、精神に関する系統的論述は従来になかったものである。第三編で女子の教育を論じ、この中で①女子教育本論②女子教育と衛生③欧米の女子教育、が論じられる。この①では女子教育の目的、家庭、学校、教授の方法などと章を分けて論じられるが、女子教育の目的として良妻賢母のほかに良姑を加えたのが特色となっている。

「姑は嘗て嫁で苛められた覚えがあるから、自分の経験に訴へて、嫁はそうあるべきものとして同じことを嫁に要求する」「今日の嫁は新しい教育を受けて新しい思想確信を有って居る、それで衝突も激しく苦痛も多い」「一体これまでの東洋の倫理は幼者目下の者の教訓をする計りで、長者目上の者に就ては殆ど何たる戒めも制裁もない。女訓でも嫁となり、妻となるの心得を説てあるが、夫や舅姑たるものの心得は殆ど全く説て居らぬ。」「女子教育の目的の中にも、良妻賢母の次に良姑といふ二字を日本では入れるべきである」(P182)と説く。

下田は次いで1906年(明39)『新女訓』(明治書院)を著す。1女子の修養、2戦争の教訓、3女子の教育の内容で、2では前年の日露戦争のほとぼりのさめない熱気で、軍国主義の教育を説く。「国力と国語」と題する一文には、英語が世界に広く通用するのはその国力の反映で、日本の商店も客をひきつけ、当世風の店とみられたいため英語の看板を出していると述べ、「戦勝の結果、今度は逆に此方より日本の看板を英米始め外国に出させたきは山々なれども」「せめては朝鮮、満州、樺太を始め東洋には日本語の看板

に至る所に見られ、日本語が話されるようにしたきものなり。それには男子もさることながら、婦人が海外に出て、裏門より向ふの家庭を日本化すること、大いに役立つべしと思ふなり」という。『女子教育』の多くの資料に基づく冷静な書き方とは一転して日本語の諸国への普及と、女性によるアジア諸国での日本化とを主張している。

5. 山口的考え方背景

ここで山口小太郎にもどる。

山口は1867年（慶応3）江戸に生まれ、東京外国語学校でドイツ語を専攻し、1884（明17）年17歳で同校を卒業。19歳で第一高等中学校の教諭となり、1889年（明22）には22歳で帝国大学文科大学特約生教育学科でドイツ文学、史学を修め、ドイツの教育学者ハウスクネヒトの講義を受けた。24歳で第一高等中学校教授となり、25歳の時には学習院教授を兼任、その後『教育精義』『エミール抄』など訳本も刊行。31歳には外国語学校教授となり『獨逸語學雜誌』を創刊、33歳の1900年（明33）には文部省からドイツ留学を命じられ1903年（明36）帰国。当時のドイツ語学、ドイツ語教育の指導的中心人物であった。今回手にした『乙女会話』は1908年山口41歳のときの刊行である。

『乙女会話』の総評の山口的女子教育観が何に帰因するのか、当時の女子教育史のどこに位置づけられるのか、そこで使われた「女性学」の語は山口的造語なのか、などについて考えてみたい。

山口はニーチェ、ショーペンハウエルの女性観を女性蔑視として批判しているが、下田も『女子教育』でニーチェ、ショーペンハウエルをひいている。先に刊行された下田の『女子教育』の影響とも考えられるが、山口は下田のニーチェ、ショーペンハウエルの引用とは別の箇所を論拠としている。

ドイツ語学者山口の本領を發揮して独自に彼らドイツ思想家を研究したものと考えてよかろう。山口はゲーテ、ハイネにも言及しているが、この二人の名は下田の方には出てこない。

女性も社会に出て働くべき、と山口は主張するが、先にみた当時の菊池文相の、女子の職業も専門の学問も否定しているのと比べるとより女性の側に

立ち、女にふさわしい職業を挙げ、それらは男をしのぐはずだと言う。そのような女性観から淑徳、貞操、優美、慈愛などを重視するのは奴隷倫理だと言う。世の主流であった良妻賢母教育とは本質的に対立する主張である。

男女同権について、時の文相菊池大麓は「忌はしい語」とまで言って強く否定しており、下田も「男女は同等ではあるが同権ではない。同権は男子のすることを女子も皆すると云ふので、これは第一天然に戻った事で双方の不利益である」(P184)という。そうした中で、山口は男女同権を世の趨勢と言い切る。また、山口は女性の研究の必要性を強調する。山口は約6000字のさほど長くない所感文の中で、女性の研究の必要を前半部で一度述べ、さらに最後にこの必要性を繰り返しながら文を結んでいる。この女性の研究については下田も二度論じている。一つは「女子の研究は未知の土地を探検するが如く(中略)最も興味あるものの一つである。併しこれまでの研究は尚幼稚で、且多くは男子がしたのであるが、我れを知るものは我れであるから、今後は女子自らの研究が盛んに出来て、主観的客観的に協同して女性の説明されたことを望み」(P161) またもう一つは、「此女性問題といふものは」「色々な方面から研究して(中略)進まねばならぬ。是迄のように唯常識又は従来の習慣ばかりから女子を観て、秩序的科学的の研究が等閑に附されて居っては女子に関する諸般の改良、進歩は難しいから、願くは読書諸君に於ても、充分女性の研究あらんことを希望する訳である」(P441)と述べる。

下田は今後の「女性の研究」は女性に期待しており、山口の男性による研究とは異なるが、女性についての客観的・科学的研究の必要性では軌を一にしている。

下田の主張は、三輪田ら当時の女性教育家たちが女大学流の良妻賢母教育を一丸となって推進していたことへの批判であり、女性自らが自己を知るべしとは、後の女性学の発想に通じるものである。

しかしながら下田はこの研究を「女性学」とは呼んでいない。

山口は先学が心理学の分野で実験調査したように「年齢身分境遇の異なりたる多くの女子の、感情意志等を細大となく記述し、これを材料として科学的の研究を尽さば、男の立場から観たる癖論の常習を脱したる真個の女性学

を建立し得べき筈である」(前掲書P38)と、ここではじめて「女性学」の語を用いる。女性学とはどんなものかについての説明は一切していない。彼の造語とすると極めて唐突な出現である。当時、流布して一般に受け入れられていた語をそのまま使ったもののような印象をうける。

あるいは、さまざまな女性の真実を記録し実験する科学的な研究で男の偏見や陳腐な常識を超えた学問が可能になる、それは名づければ女性学だ、と山口が思考の過程で生み出したことばだったかもしれない。

山口が以上のような女性解放を志向する思想を抱くに至ったのは、ドイツ留学が大きく影響していると思われる。下田も独、英、仏に留学し、進んだ女子教育の紹介をし、女子の身体と女子の心理の科学的な研究を主張して情緒、主観に傾斜しがちな女子教育を批判した。しかし、良妻賢母教育の大きな流れの中では、それに抗することはせず、それどころか良姑主義をも唱えてそれを補強する側に回った。山口は、『乙女会話』の総評で席を並べている下田の著作は当然読んでいるはずで、その着想をとり入れていると思われる箇所はあるが、さらに一歩進めている。従来の、男性中心の、男性にとって都合のよい女子を育てる女大学式の教育を決然と退け、「女の向上、女の発達を真剣に」と言い、「予は日本の男が『女だから』とって、何事も女にさせず、又女自身も意気地なく引込むのは、二十世紀の世界の趨勢には適はぬものだと思ふ」(同P37)と言い切り、「女性を真正に理解」(同P38)するための女性学を提唱している。

以上、山口小太郎という明治の女子教育界では注目されることのなかったドイツ語学者の女性観と「女性学」の用語を紹介し、その背景を概観した。

「女性学」の語の由来、山口の思想形成に影響を及ぼした人物や著作について十分な論究はできなかった。

今後山口の他の著作、雑誌論文などへも目を向けながらこの興味ある男性とその思想をより深く探っていきたいと考えている。

なお、山口の略歴の調査は早稲田大学大学院西山由美子さんをお願いした。精密な調査に感謝している。そして、なによりもまず、この貴重な本を贈ってくださった櫛田ふきさんに心からのお礼を言いたい。

【参考文献】

- 宮原 誠一『教育史』（日本現代史大系 東洋経済新報社 1963）
下田 次郎『女子教育』（玉川大学出版 1973）
桜井 役『女子教育史』（教育名著叢書③日本図書センター 1981）
伊ヶ崎暁生・松島栄一編『日本教育史年表』（三省堂 1990）

注1. NHKラジオ番組「女子教育史」（1995年4月3～6日、PM11：10
～ 第1放送「ラジオ深夜便」）